

高校生の研究活動展から見えてきた課題と展望 —常設展示 みんなの研究ひろば—

三浦 武司

要 旨

福島県文化財センター白河館常設展示室の一角で、高校生の研究成果を紹介するミニ展示を2か年にわたって行った。高校生の研究成果は、地域に根差した研究が多く、郷土への愛着を醸成するものであった。

本論では、その中で見えてきた高校生の郷土研究・地域研究を行う文化系部活動の衰退や、社会環境の変化に起因する課題を取り上げた。日本社会が内包する課題も多いが、高校生の研究活動を後押しするような取り組みが官民いすれからも行われ始めた。また、文化財保護法の改定により、これまで以上に地域史が注目されつつある。地道な郷土研究や地域研究を行っている高校生の活力は、より重要性を増し、地域づくりや地域起こしに一役買うことが期待できる。今後のまほろんの取り組みとして、研究発表の場を創出していくなど、高校生の活動を盛り上げていきたい。

キーワード

常設展示 みんなの研究ひろば 郷土研究・地域研究 高校生の研究発表

1 はじめに

福島県文化財センター白河館(以下、まほろんという)では、企画展「被災地の文化財 双葉高校史学部の歩み」を2017年12月16日(土)から2018年3月18日(日)まで開催した。この企画展は、郷土の歴史を掘り起こしてきた高校生の活動を紹介するとともに、東日本大震災に起因する原子力災害によって長期的避難を余儀なくされている双葉郡の人々が、郷土の歴史を再認識し、歴史と文化を未来につなぐあり方を考える機会となる展示であった。

この展示から着想を広げ、常設展示室に既設されている「みんなの研究ひろば」コーナーにおいて、現在の高校生が行っている郷土研究・地域研究の活動を紹介する新たな試みを企画した。この高校生の研究活動を紹介するミニ展示は、2018年度から実施している。2018年度に2校、2019年度には1校の研究活動を紹介した。また、各校の展示期間中には、まほろんに生徒を招いて研究報告会を行っている。この報告会は、館長講演会の時間の枠内でゲスト報告という形で30分程度の報告会を行い、報告を聴いた館長と報告者および顧問教員とが対談を行うというものであった。その中で、研究の苦労話とともに、社会情勢に起因する現在の高校生の活動が抱える課題が見えてきた。

本論では、この2か年間に行った高校生の展示や

報告会の概要を紹介するとともに、展示を通して見えてきた郷土研究・地域研究を行う高校生ならではの課題について述べる。さらには、福島県の文化財の教育普及という重要な役割を担うまほろんが、これら高校生の活動を含めた郷土研究・地域研究を通じた地域づくりの人材育成に果たすべき役割について、今後の活動の展望を記してまとめとする。

2 まほろんでの高校生の活動

(1) 2018(平成30)年度

①福島県立新地高等学校おもひの木プロジェクト 地理歴史班「大津波伝承の研究」

7月20日(金)から9月30日(日)の期間で、新地町の大津波に関する伝承と、東日本大震災での経験



写真1 新地高等学校の展示風景

高校生の研究活動展から見えてきた課題と展望 —常設展示 みんなの研究ひろば—

を含めた語り部活動に関する展示を行った。大津波伝承の研究は、津波に関連した地名や神社の立地を調査し、東日本大震災での津波到達地点とこれらの関係を調査した研究であった。この研究は、奈良大学で開催された2017年度第11回地歴甲子園全国高校生歴史フォーラムで、優秀賞・学長賞に選ばれている。過去の事実を正確に未来につないでいくことの大切さをテーマとした研究は、実体験をもとにした被災体験を後世に伝える語り部活動にまで発展している。その活動範囲は、福島県内にとどまらず、南海トラフ地震による津波被害が想定されている地域などにも及んでいる。

津波伝承の研究成果とともに、地歴甲子園全国高校生歴史フォーラムで受賞したトロフィーや賞状、生徒が行った語り部活動を紹介した冊子などを展示了(写真1)。

また、来館者がこの展示を見て感じたことを木の葉形の付箋に記して、パネルに貼って作り上げてい



写真2 参加型展示パネル「おもひの木」



写真3 まほろんでの新地高校生の研究報告風景

く参加型の展示も行った(写真2)。

展示期間中の9月29日(土)には、生徒2名による、東日本大震災の津波被害の実体験と、大津波伝承の研究、徳島県で行った語り部活動についての報告が行われた(写真3)。

②福島県立福島高等学校SSH「鐵・刀・日本の文化」の研究

10月2日(火)から12月2日(日)の期間で、SSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)における取り組みのひとつとして行われた福島高校の研究成果を紹介した。この研究は、福島県の古代製鉄技術について探究し、製鉄技術の粋とも言える日本刀の技術を通して、日本文化について考えるという内容であった。生徒は校内での製鉄実験や日本刀の鍛錬体験を経験し、さらには刀匠や製鉄遺跡の発掘調査関係者との対話を通して、福島県内の鉄の文化に理解を深めたようであった。

展示室には、校内の製鉄実験でできた海綿鉄を展示了。体験活動時の写真や校内文化祭で報告したパネルなども紹介した。あわせて、当館収蔵の製鉄関連資料や製鉄実験資料も展示した(写真4)。



写真4 福島高等学校展示風景

(2) 2019(令和元)年度

①福島県立相馬高等学校郷土部「相馬高校郷土部のキセキ」

9月25日(火)～12月8日(日)の期間で、相馬高等学校郷土部の活動を紹介し、郷土部所蔵資料の一部を展示了。終戦直後の昭和21年に創部した県内で最も古い部のひとつである郷土部は、日本考古学史に残る多くの遺跡の発掘調査に参加している。この展示では、現在の郷土部の活動を紹介しつつ、

当時の郷土部生の活動についても顕彰する内容とした。

現在の郷土部生は、5月19日に開催された一般社団法人日本考古学協会第85回(2019年度)総会内の高校生ポスターセッションに参加し、8月4日開催の九州国立博物館主催「全国高等学校歴史学フォーラム2019」においても野馬土手に関する研究発表を行っている。まほろんでは、現在の郷土部生のこれらの活動を、パネル展示で紹介した(写真5)。



写真5 相馬高等学校のパネル展示風景

この他、郷土部所蔵の三貫地貝塚出土土面や縄文土器、成田藤堂塚遺跡出土の弥生土器、丸塚古墳出土の人物埴輪、福迫横穴出土の須恵器と玉類、高松古墳群1号墳出土の玉類などの考古資料、さらに当時の遺物実測図面や発掘調査日誌、発掘届などの諸手続きに關わる公文書なども含めて展示した(写真6)。遺物実測図や発掘調査報告書の手書き原稿、発掘調査日誌などは、当時の高校生の活動記録として貴重な資料であり、かつ成果報告としても秀抜であった。『真野古墳発掘書類綴』としてまとめられた史料は、「埋蔵文化財発掘届」や「土地所有者への



写真6 相馬高等学校の展示風景

学術調査承諾書」、「埋蔵文化財発見届」、「埋蔵文化財現物譲与願」などの発掘関係書類とともに、「郷土部保護者への発掘合宿のための承諾書」に至るまで綴られている。学生や学校を含めた地域全体が、文化財や郷土の歴史について高い意識を共有していたことが垣間見えた史料であった。戦前の皇国史觀に基づいた歴史認識から、考古学の手法で郷土の歴史を明らかにしていく気運が盛り上がった時代背景が浮かび上がる。また、生徒が手書きした発掘調査報告書の下書き原稿には、顧問の教員による修正箇所も見て取れ、推敲を重ねた当時の郷土部生の息づかいが感じられるものであった。

会期中の9月28日(土)には、生徒2名による郷土部の活動の歴史と所蔵資料の紹介、現在の郷土部の活動内容についての報告があった(写真7)。



写真7 相馬高校生の報告風景

3 見えてきた諸課題

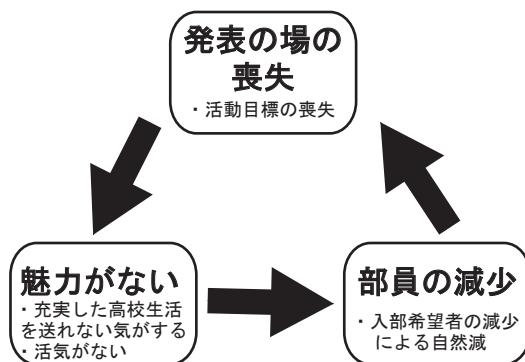
これらの展示を通して、活動を行っている学生や顧問の教員と話をする機会があった。その中で見えてきたのが、学校を取り巻く社会的環境の変化と文化系部活動の衰退であった。以下、郷土研究や地域研究を志す高校生の活動について、見えてきた課題を挙げていこう。

(1)活動発表の場の喪失

1つ目として、郷土研究や地域研究を行う文化系高校生の活動発表の場が非常に少ないとあげられる。福島県高等学校文化連盟が主催する福島県高等学校総合文化祭においても、郷土研究や地域などの発表機会がないのが実情である。全国的に見ても、主な発表の場としては、奈良大学と奈良県主催の高校生歴史フォーラム^{註1}や九州国立博物館が主

催する全国高等学校歴史学フォーラム、一般社団法人日本考古学協会・福島県考古学会主催の高校生ボスターセッション等に限られるようである。

研究成果を発表できる場の喪失は、研究を行っている生徒の活動目標が設けにくく、文化系部活動の入部希望者の減少につながっていくという負のスパイラルにつながる(第1図)。そのため、休部状態の部活動を含めて、福島県高等学校文化連盟に登録されている県内高校の歴史部は4校、郷土部は4校であると御教示いただいた。^{註2}



第1図 負のスパイラル相関図

(2)学校現場におけるリスクマネジメント

2つ目の要因として、生徒によるフィールドワークが限定されてしまうという社会環境がある。昭和50年代頃まで各学校で盛んに行われていた夏休みなどを利用しての合宿や発掘調査などのフィールドワークは、安全管理や責任問題などが厳しく問われる今日では、より制限され、難しくなっている。

(3)教員の働き方改革

3つ目の課題として、部活動や授業の一環として研究活動が行われているという高等学校ならではの問題がある。高校生の活動の内容は、どうしても顧問の教員などの熱意に支えられている面が大きい。熱心な顧問の教員が指導していても異動があり、活動の継続は困難となってしまう可能性がある。

また近年、教員の働き方に関する意識の高まりがある。以前の学校指導要領や中央教育審議会の働き方改革答申では、部活動は教育課程外に実施される教育活動の一つであり、顧問の就任は業務命令ではなく、依頼であるという認識であった。しかし、2019年1月に公開された「公立学校の教師の勤務時

間の上限に関するガイドライン」では、教員の勤務時間に関する基本的な考え方については、教員が校内に在校している時間を勤務時間とすることとし、授業・学級運営準備と部活動時間と含めて45時間を超えないようにすることと規程された。これにより、活動の時間は教員の勤務時間や開校時間に限られ、活動の場は主に校内が中心とならざるをえないことが多くなる。また、教員によっては、複数の部活動を担当する例もあり、過密な勤務となっている例も散見される。教員の忙しい勤務実態が垣間見える。

(4)少子化・縮小化

4つ目の課題として、人口減少があげられる。総務省統計局によると、令和元年8月1日現在で日本の総人口は1億2621万9千人と推定されている。2008年の1億2808万人をピークに減少傾向にある。国立社会保障・人口問題研究所が公表している将来人口統計では、2053年には1億人を割って9,924万人となるものと推計されている。

まほろんには、多くの小学生や中学生が来館する。学校の統廃合や学級数の減少という形で、少子化の実情を折に触れ実感している。このことは高校にあっても例外ではなく、生徒自体の減少による部活動の統廃合が検討され、また実際に実施されている。生徒が少なく、学校自体の部活動の維持・存続が困難になっているようである。部員が少ない部活動や、あまり活動が活発でない部活動は、統廃合の対象となっているようだ。また、2023年度までに県立高校自体を統合再編^{註3}する計画が発表されるなど、少子化に伴う影響は加速するものと思われる。

これらの諸課題のうち、上記に示した(2)～(4)の課題は、現在の学校や社会が抱える問題から派生したものであり、一朝一夕に解消できるものではない。一方、(1)活動発表の場の喪失については、好転する糸口が見えてきた。次章では、その展望について考えることとする。

4 これからの展望

まほろんで紹介した高校生の研究活動を含めて、高校生の活動は、地域に根差した研究が多い。近年、高校生の活動を後押しするような取り組みが、官民

両者から始まっている。再び、地域や郷土に関する興味関心が高まっているようだ。

(1)新しい取り組み

2003年から認定がはじまった日本遺産^{註4}は、地域の歴史的魅力の掘り起こしによる、地域活性化を目指した取り組みである。この日本遺産として、地域研究に焦点を当てる取り組みは、高校生の活動にも波及している。

國學院大學では、「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストを2005年から実施している。この取り組みは、同大学と高校生新聞社が共同主催し、高校生が住む地域あるいは通学する高等学校の所在地域などに伝わる昔話・伝説や祭り、伝統行事、郷土料理、方言などの文化の調査研究に目をむけ、地域文化がもつ意味を考え学ぶ趣旨のもとに行われている。

また、今年度開催した第43回全国高等学校総合文化祭佐賀大会では、協賛部門として郷土研究部門が特設された。北海道から沖縄県までの21校の研究発表が行われた。古墳群の研究や地域景観の調査、鉄道の廃線調査、外国人へのアンケート調査など、多様な活動の取り組みが報告された。

さらに、官民連携の事業も実施されている。クールジャパン官民連携プラットフォーム(事務局は、内閣府知的財産戦略推進事務局)では、2018年に「クールジャパン高校生ストーリーコンテスト」を開催した。このコンテストは、高校生が自分の住む地域や日本ならではのクールジャパン^{註5}資源を発掘し、その魅力を外国人に伝えるための「ストーリー」を考えるものである。地域に伝わるお菓子の歴史や文化的な背景についての研究や、地域の景観を巡るツアー構想などがプレゼンテーションされた。

このような取り組みからは、郷土研究や地域研究の盛り上がりの萌芽が見て取れる。地域資源の掘り起こしへつながっていくことが期待される。

(2)文化財保護法の改定による波及効果

さらに今年度、改定された文化財保護法が施行され、地域の文化財の総合的保存活用を促進する内容となつた。過疎化や少子高齢化に起因する文化財の滅失や散逸等を防止する目的で、未指定を含めた文

化財を地域住民総がかりで継承していく取り組みを推奨する内容である。県が策定する文化財保存活用大綱を受けて、市町村は文化財保存活用地域計画を作成することができる。

文化財保存活用地域計画に関する文化審議会の答申には、「文化財やその所有者に最も身近な行政主体である市町村の単位で、地域住民と緊密に連携しながら、消滅の危機にある文化財の掘り起こしを含め、文化財を総合的に把握し、ここから多様な発想を得て地域一体で計画的に保存・活用に取り組んでいくことが極めて重要である。」、さらに「歴史文化基本構想を構想にとどまらず、関係者がパートナーシップを結び具体的なアクションにつなげるマスターplanとして発展させ、国・都道府県・市町村間の連携強化のみならず、地域住民や民間団体等の主体的参加や協力も得ながら、地域社会全体で、未指定も含めた多様な文化財を次世代へ確実に継承していくことが必要である。」と記されている。

官民の盛り上がりに加えて、文化財保護法の改定による法整備が進んだことにより、今後ますます地域史の掘り起こしが注目されるようになる。

(3)まほろんの取り組み

前述したように、まほろんでは、過去2か年にわたり、高校生の活動を紹介する取り組みを行ってきた。高校生の取り組みは地域に根ざした研究であり、地域史・郷土史を再発見する内容であった。まほろんでは、次年度以降も高校生の活動を紹介する展示を継続する予定である。文化財に限らず、幅広く郷土研究を行っている高校生の活動を定期的に紹介していきたい。これらの取り組みを通して、郷土の文化財を守り、未来に伝えていく人材の育成に寄与したいと考えている。

また、2020年度には、新学習指導要領が改訂される。これを受けて、教育現場では様々な取り組みが始まると想定される。日本史A・世界史Aに代わり設置される、「歴史総合」は、現代的な諸課題と歴史を学び、近代化・大衆化・グローバル化に着目する内容となっている。また、世界史的視野に立った歴史を学んだのちに日本の動向を学ぶ構成となつていて。その目的は、歴史の大きな変化に着目して理解の深化をはかり、歴史的な見方・考え方に基づ

き、社会的事象を考察する力、構想する力、議論する力を養うというものである。現行教育課程でも求められていた資料の活用については、「歴史総合」でもより重視されており、新学習指導要領「内容の取扱い」では、「年表や地図、その他の資料を積極的に活用し、文化遺産、博物館や公文書館、その他の資料館などを調査・見学したりするなど、具体的に学ぶよう指導を工夫すること」を求めている。

これらは、「見て・触れて・考え・学ぶ」をメインテーマに掲げているまほろんの設置目的に合致する。文化財を活用することで、地域の文化に興味をもち、感動して文化財を守る心を醸成していく機会となる。また、まほろんの常設展示の「食」・「住」を際立たせた特色ある展示は、年代や地域を超えて見学者が共感を覚えるものとなっている。ますますの活用促進を願うものである。

まほろんで企画した高校生の活動の展示は、生徒の成長を促す教育活動でもある。この取り組みの意義に賛同し、これを積極的に利用する教育関係者が増えることを期待したい。

5 おわりに

高校生の研究発表は、内容や完成度という点では、未熟な部分もあるであろう。しかし、筆者は、地域を元気にする人材としての高校生の可能性を大事にしたい。高校生の関心を地域に向けさせるためには、教員が抱える課題やニーズを理解しつつ、高校生や教育関係者との関わり方を、地域側も検討する時期に来ていると考えられる。

高校生が郷土や地域と関わることにより、以下の可能性が生まれると考えている。

①大人世代の「気づき」や変化を促す

新地高校おもひの木プロジェクト地理歴史班による研究は、地域住民が東日本大震災が起きるまで忘れてしまっていた地名や伝承などを掘り起こした研究であった。さらに、多様な世代に発信する語り部活動を通して、津波被害の伝承や被災経験に基づく「気づき」を与えていている。

②地域への愛着の醸成

相馬高校郷土部の展示資料は、当時の高校生が自らの手で、地域の歴史を掘り起こした貴重な資料であった。当時の高校生がそうだったように、自分が

住んでいる地域に関心をもち、その魅力を知ることで地域への愛着も高まるであろう。

このような可能性を秘めた高校生に、まほろんは研究発表の場を創設することで、郷土や地域を思う人材の育成に寄与したい。

田中敏は、「子供たちに自分たちの地域を見直してもらう」ことを重要視して展示解説したいと述べている(田中2008)。筆者は、この「子供たち」という言葉については、「高校生」または「大人たち」とも読み換えるものもあると考える。自分たちが住んでいる地域に、先人が残した文化が存在することを改めて見直す契機ではないかと考えている。

さいごに、福島県民は、東日本大震災とそれに伴う原子力災害により、好むと好まざるとにかかわらず改めて地域と郷土を見直すきっかけを得ることになった。「地域とは」「郷土とは」「文化とは」を自らに問い合わせた結果となりたのである。今こそ、我々福島県民は、これを生かさない手はないのではないか。

【註】

註1 2018年度より、高校生歴史フォーラムに名称変更している。
註2 福島県高等学校文化連盟の難波氏の御教示による。2019年8月時点での休部も含む数字である。

註3 県立高校96校が81校に統合されることとなる。

註4 県内の日本遺産は、「会津の三十三観音めぐり～巡礼を通して観た往時の会津の文化～」、「未来を拓いた「一本の水路」～大久保利通「最期の夢」と開拓者の軌跡・郡山・猪苗代～」の2つが認定されている。

註5 クールジャパンとは、世界から「クール(かっこいい)」と捉えられる日本の魅力を世界に発信する内閣府が主体となる戦略事業。

【引用参考文献】

福島県立新地高等学校 2019『おもひの木プロジェクト活動報告書(201803～201902)』
田中敏 2008「子供たちに学ぶ楽しさを～まほろんでの取り組みと今後の展望～」『福島県文化財センター白河館研究紀要2007』

【図・写真】

図1 筆者が作図した。

写真1～7 当館職員が撮影した。